

因縁浅からぬ 十二面観音像との出会い

日本彫刻会会員 稲田 勇



私は、二十七歳の折、縁あって今は亡き田島亀彦先生のもと彫刻の手ほどきを受けるようになりました。彫刻を志す者の常として、私も当時、モチーフに仏像を盛んにとり入れていました。

そういったある日、近所の方が「長谷寺には素晴らしい観音様がありますよ。」と教えてくれました。

彫刻を始めて日が浅いとはいえ、一目見てただの仏像でないことは私にも分りましたから、早速、田島先

生に見ていただくことになりました。ところが、せっかく熊本から小川の私の家まで来てくださった先生も、めざす仏像が同じ小川町とはいえ山中にあると聞くと、「また次の機会にしよう。」とか「名品といえる仏像は、そんなにどこにもあるものではない。」とか言われて、なかなか重い腰をあげようとはしてくださいませんでした。

それでも、やつとの思いで気乗りしない先生(当時六十歳)を口説き

落して、ポロ自転車(荷台)に乗せ、戦後間もない頃の田舎道を山の麓まで一所懸命こいだものです。

ようやく山頂にたどりつき、息をはずませながら堂のあたり口(口)に手をつけて、じつと中の仏像を覗き込んでおられた先生の顔色が一瞬さっと変りました。そして「こらあ稲田君、快慶だ。どうしてまたこんな所」と言われたまま絶句してしまわれました。

その後が大変で、学者や報道陣が

大勢詰めかけ、私にとって一生忘れることのできない思い出となりました。

彫刻を一言で表わすならば「空間に占める造形性」だと思います。立像などでも、その像をどういうポーズにするか決めた時に、大半の作品の良し悪しが決まってしまうような気がします。

「静」の中に「動」がある仏像は、一見静かなようで私達に「生きている」という感じを与えてくれます。

木造十二面観音立像が安置されている雲山長谷寺は、八代市にある曹洞宗菩提寺の末寺で鎌倉時代の創建と考えられています。木造十二面観音立像は、松の寄木造りで、高さ二〇センチメートル、左手に水瓶、右手は垂れて与願の印をむすんでいる。右腕、両側の天衣、足先、台座、光背や頭上の化仏の一部などは、後で補修・補作がなされている。

深い慈悲に満ちた大きな肩や切れ長の目少し紅をさした唇などが印象的で、鎌倉時代末期の作と思われるが作者は不明である。なお、「肥後国誌」には、快慶または安阿弥の作と伝えている。



心のふるさと民話とわたし

金馬

この昔話を読んで、吾市の知恵と勇氣、アオをかわいがる気持ちに大変感心しました。そういう吾市の心が、村の人々の協力を生み、あの大だこ

に勝つたのだと思います。

アオのために何日も松の木の上から、根気強く海を見張り続けていたが、ふつうの人だったら、二、三日でねをあげていただろうに。吾市は怪物の正体が、とつともない大きいたこだと知った時、どうしようもないと思っただけにちがひありません。でも、金馬作戦の思いつきは、ぼくも「これは、いけるぞ。」と思いました。大だこが、黒こげになって死んだ時は、「やった。」と思わず心の中でさげびました。アオのかたきごとれて本当によかった。

助け合いが、うすれている時代です。吾市と佐伊津の人々の昔話を読んでうれしくなりました。

最後に、吾市が、何日も見張り続けたというみさきの先の松の木が残っていればなあと思いました。



「金馬」あらまし

天草の佐伊津村を流れる隈田川の川口は、白砂の洲になっていて、たいへん美しい所です。

ある日、寺尾の吾市が白洲で馬のアオを洗っていると、とつぜん「ヒヒーン」と高いなないて、あつという間に深みに引きずりこまれてしまいました。その後も、何頭かの馬が海の中に消えていきました。

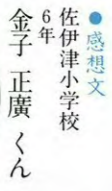
吾市は、大好きだったアオのかたきをとろうと、岬の老松のうえから三日も四日も根気強く海を見張り続けました。七日目のことです。きれいに澄んだ海の底に大だこが見えます。怪物の正体がわかった吾市は、村の人と相談して、かじやさんに頼み、普通の馬と同じくらい大きな金の馬を作ってもらいました。出来上がった馬の腹の中には火のついた木炭が詰め込まれ、口からうすい煙が立ちのぼる頃には金馬の背や胴はまっかに焼けていました。

やがて、海底をすべるようにしのびよってきた大だこが、目を光らせながら、いぼいぼのついた長い足で馬の体をしめつけるように、全身を巻き込んでしまいました。ところが、相手はまっかに焼けた金馬ですから、たまりません。「ジュジュウ、ブルブル」大だこは、黒こげになって死んでしまいました。

そこをいつからか「金馬」というようになり、その後「金浜」、今では「金ヶ丘」と呼ばれています。



●感想文
6年 健くん
原田



●感想文
6年 正廣くん
佐伊津小学校



●感想文
6年 健くん
原田